「漢字カード」効果の証明

工藤美智子先生（東京/深大寺教室）

あいまいな“自閉症”の規定

“自閉症”――ふだん私たちは、この言葉を安易に使っていることが多い。しかし、“自閉症”それ自体、原因も含めての正確な概念規定はなされていないのが現状である。症状の面から見ると、生活環境から派生する心理的、社会的要因の関りが大きい情緒障害のひとつに位置づけられるが、原因面から考えると、最近は否定的な傾向にあるという。むしろ、物を感じる、言葉を話す、という機能そのものに障害がある、一種の“脳機能障害”であるという説が強まってきている。

自閉症児のその特徴として、学校において実際の指導にあたられている高橋晃先生（東京・五本木小学校教諭）は、

⑴ 孤立　⑵ 固執　⑶ 多動　⑷ 言語発達の遅滞　⑸ 興味・関心の偏り　⑹ 指示・禁止　⑺ 自傷行為、パニック、奇声、独言　⑻ 感覚認知の異常

を挙げ、教師として困惑する状況として、

① 勝手に行動し、集団に帰属しない。

② 興味や関心の偏り、固執傾向かあり、学習活動に参加させることが困難である。

③ 言語の発達が遅れ、その障害の特質とも相まって、言語による意志の交流がむずかしい。

④ 各種の異常行動や学校の内外の放浪、興味や関心の偏りなど、安全の確保がむずかしい。

と述べている。

〔第四回教育夏期大学（主催・日本心理適性研究所）情緒障害児教育講演会テキストより〕

このような自閉症児の特徴を示されると、通常、私たちが見ている“上手にお話ができない”“お友達とうまく遊べない”“引っ込み思案で目を合わせることができない”などという子供に自閉症と名づけてしまうのは、早急というものではないでしょうか。

ボランティア活動で知り合いに

毎週金曜日、K君宅へ工藤先生は出向く。午後2時、5人の自閉症児たちが、工藤先生の訪問を待っている。大判漢字カード、Ⓐ教材

を使用してのマンツーマン指導、学習時間は一人 10〜20 分と短いが、徐々にその効果が現われてきた、とお母さんたちは目を細める。

「昨年の 4 月ごろでしたか、調布市の福祉協議会から“K 君、A ちゃんという自閉症の兄妹に学習指導をしてくれないか”という電話を頂いたのがきっかけなんです。以前、“ボランティア――子供の学習”と登録していたのを、きっと思い出されたんですね。

私はそれまで、教育夏季大学の“情緒障害児教育”などを受講していましたので、自閉症についてはある程度、わかっていたつもりだったのですが、いざ接してみますと、私の認識がいかに皮相なものだったか、イヤというほど、思い知らされました」

K 君、A ちゃんの学習は目、鼻、口などが大きく書かれている漢字カードから。やはり、体の部分名称から入った方がより興味をひく、という。

しかし、じっと座っていてはくれない。自分の興味外のことには、なかなか関心を示してはくれないのだ。部屋の中を奇声を発しながら歩き回る。工藤先生の指導は、まず学習と取り組ませることから始まった。

「学習を指導する、というより、友人として、仲間としてつき合うことが、この子供たちとのふれあいのポイントだと思います。

でも一口にこう言っても、慈善でなく、同情でもなく、意気込んだ使命感でもなく、ごく自然な感情でこの子たちと接する、これは確かに難しいですね。私自身、なぜこのようなことをしているのだろう、単なる慈善行為じゃないか。イヤ違う。そんなつもりはない。などと悩むことが多いですし、今もってその繰り返しなんです。ただ最近、思い始めたのは、たとえ、どのような感情を思っていても、いつまでその子たちに接してあげられるのか、時間が私にその解答を与えてくれるのでは、と思うようになりました」

「障害児」にこそ漢字カード

K 君のお母さんの紹介で、54 年 7 月から T 君、11 月から S 君、そして 35 年の一月に M 君が、工藤先生の指導を受けることになった。各々のお母さんは「“うちの子、漢字を読めるようになったし、名前も書けるようになったのよ”と K 君のお母さんの言葉に驚き、あわててうちの子もぜひ、とお願いしたんです」と口をそろえる。

5 人の重度の自閉症と診断された子供たちの症状と学習状態は次のとおりである。

- K 君＝小 3 体は大きく、少々肥満型。言葉が不明確で、多少、乱雑な行動をとる。石井式の漢字カードから入り、現在、公文式の大判漢字カードとⒶ20。読める漢字が 8 か月で 15 に増えた。
- A ちゃん＝小 1 5 人の中では一番軽度。手の甲をなめ、それを顔にこすりつける動作が間断なく続く。以前は足の指までとのこと。大判と普通判を併用。Ⓐ40 を学習、かなりきれいに線が書けるようになった。読める漢字は 40 ほど。かなり正しい発音ができる。
- T 君＝小 3 “貴公子”然とした風貌。学習面では一番の遅れ。甲高い奇声を発し、言語はほとんどない。目、耳などの顔の部分名称を言わせているが、今のところあまり効果が見られない。
- S 君＝小 1 小柄で愛くるしい顔、朗らかで人なつこい性格である。T 君同様、言語はほとんどない。静かに着席ができ、“学習”をすることはできる。顔の部分名称から指導。
- M君＝小 1 いたずらっぽい顔がとてもかわいい。以前、ボランティアの会合で、工藤先生になつき、“別れるのイヤだ”という風に泣いたという。

5 人の子供たちをじっと見ていると、様々な行動形態を示す。しかし、特徴的なのは互いのコミュニケーションがないということ。通常、子供たちが集まると、チョッカイを出したり、ケンカをしたりすることが多いが、彼らは唯我独尊、まわりの動きにあまり気をとられない。

「漢字カード、特に大判は、この子たちのようなハンデを特った子に効果があるように思います。名前が書ける、明確ではないが発声をしようとする。“耳”というカードを見せると、手を耳に持っていこうとする。漢字カードの一つの効果が示された感じがいたしますね。

でも、“効果がある”と言い切るには、まだ時期尚早でしょう。だって私たちは、ハンデを背負った子どもたちに今、出合ったばかりなのですから」

私たちの“障害児”教育は始まったばかり、と工藤先生は力説される。それは何も“障害児”に限ったことではない。子供たちをよりよく導くために、自分にこり固ってはいけない、と強調されたかったのだろうか。